

NHK放送番組「J文学」の教材化：
宮澤賢治作「祭りの晩」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 正雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005663

NHK放送番組「J文学」の教材化

—宮澤賢治作「祭の晩」—

How to Use 'J Literature' as English Teaching Material

—“Night of the Festival” by Kenji Miyazawa—

林 正 雄

Masao Hayashi

（平成22年10月6日受理）

はじめに

NHK教育テレビ番組には教室で映像資料として利用できるものが少なくない。教材としてそのまま使用できる編集済の番組も有用であるが、通常の番組を教員が自分なりに編集して教室で提示する方法もある。後者の場合は、自分の授業の内容に即した映像資料として自然な形で教育効果を上げることができる。

本稿では、「J文学」の中から中・高等教育で利用できると思われる宮澤賢治作「祭の晩」を例にとり、その利用方法を考察した。「J文学」はロバート・キャンベル氏の日本文学解説、およびキャンベル氏と依布サラサ氏の文学トークの二種類の5分間番組から構成されている。外国人の目から見た日本文学解釈には、斬新な視点がうかがえて興味深い。短い時間の中で凝縮された日本文学解説が英語音声と日本語字幕で説明される。国際的な時代を反映した番組といえる。英語のスピードは速いので、教室での使用には限界があるが、視聴者によっては淀みなく溢れ出す英語のスピード感と言語機能の妙を圧倒されながらも楽しむことができる。

大学生向けの英語教育の教材として利用するために早口の英語で語られるキャンベル氏の英語解説の SCRIPT を書き起こした。氏の卓越した発話の流れを原語で理解していただきたいと考えたためである。この童話の理解を深めたうえで、将来教職に就く学生は自分なりに教材導入することを期待している。

この童話は、人を憐れむ心の大切さやよそ者を受け入れることによって生まれる喜びの心を描いている。「和をもって尊しとなす」とする日本人の心情を伝える情操教育の教材として中・高等教育のホーム・ルームの時間などで利用することもできよう。そのような関心からこの童話についての学生の感想を採録した。また、本離れしている学生がインターネットを用いて文献渉猟するための方法を例示した。

1. 宮沢賢治作「祭の晩」

日・英語解説スクリプト

以下の英語は英語音声の書き起こしであり、日本語は画面のスクリプトを書きとったものである。英語音声の聞き取り練習あるいは日本語スクリプトからの英訳練習として利用できる。¹

男は金色の目をぱちぱちさせて、汗をふきふき云いました。

“Let me go now.” The man was blinking his golden eyes and wiping furiously at the sweat.

宮澤賢治の日本語の魔術性は幾世代もの読者の心をつかみました。宮澤賢治は生前は無名の作家で作品の多くは死後出版されました。1940年の「祭の晩」は村祭りに現れた山男が少年に助けられるという話です。

Miyazawa Kenji had a magical sense of the Japanese language which captured the hearts of generations of readers. He was virtually unknown however, during his lifetime. Most of his works were published posthumously, as was “Night at the Festival” which was published in 1940. The story centers on a woodsman who appears suddenly at a village festival, and is saved by a young boy.

温かみのある作風で今もお愛され続けている作家・宮澤賢治の童話。

村祭りに出かけて主人公・亮二は顔が赤く金色の目をした大男が責められている場面に出くわす。団子を食べたがお金がなかったからだ。大男は、薪と栗を持ってくるから許してくれと、涙ながらに訴える。その涙を見た亮二は、大男が正直ものだと感じて団子の代金を肩代わりする。爺さん

にその話をした亮二は、その男が山男だと知らされる。その夜、亮二の家の庭には、薪と栗の実が一面に投げ出されていた。素朴な山男と優しい亮二との心温まる童話である。

Miyazawa Kenji’s fairy tale “Night of the Festival” is still loved today. Ryouji sets out for a festival. He comes upon villagers harassing a shaggy giant with a red face and golden eyes. The man ate dumplings but had no money to pay. He begs for forgiveness. He promises to bring firewood and chestnuts to settle the debt.

Moved by the man’s tears, Ryouji pays for the dumplings. Ryouji’s grandfather hears what happened. He says the man must be a mountain giant. During the night, Ryouji’s garden is filled with chestnuts and firewood. The tale of kind Ryouji and the good-natured giant is truly heart warming.

どこからか突然やってきた山男はよそ者です。日本の村祭りは仲間内の行事。コミュニティを侵食するよそ者との関係に緊張感が走ります。よそ者である山男は拒絶されます。「ぶん殴れ」と誰かがけしかけ村の衆は殺気立っています。

The woodsman who appears suddenly from nowhere is an outsider and festivals in Japan are very, very sort of inside affairs. So that someone from outside, when they come in, there’s often a sort of slights, sort of tension about how to cross the threshold into the community itself. He’s completely an outsider, and they try to reject him. Someone in the crowd says “Knock him over, punch him.” And

then there's suddenly this sort of violent, sort of swell that comes up from the people who are watching the festival itself.

よし、僕が助けてやろう。

Right. I'm going to help him out.

山男の涙を見た少年は、善人に違いないと直感。コミュニティーがよそ者を警戒するのは自衛本能です。それは無垢な子供にはありません。困っている人には同情するものです。少年は感情をストレートに表しています。

He is saved because a very young boy, Ryouji, notices the tears in his eyes. And he understands instinctively that these tears mean that the woodsman is a good man and that he didn't come there especially to try to cheat the people.

And it reminds us that everyone in a community has a sense of what's inside the community and anxiety toward what's outside of it. We all have this sort of self-protective instinct which is something that is brought up in us, which we didn't have when we were children, and this sort of pure childlike wonderment and sort of pity for people in trouble, for living beings in troubles is something which this young boy expresses very well, and very, very straight on in this short story.

一緒に涙もふいたようでした。

He seemed to be wiping away some tears as well.

この寓話にはキリストの教えとの共通点

があります。宮澤は熱心な仏教徒で法華経を信奉していました。しかしキリスト教の自己犠牲的な愛にも関心がありました。山男は日本の山の神々からの遣いです。涙と苦痛を村人に見せたのは善の尊さを教えるため。それをとっさに感じ取った亮二は山男から恩返しをされます。それはイエス・キリストの考えに似ています。しかし賢治は自分の宗教観を読者に押し付けるようなことはしません。祭を背景にしたこの話から、それを導くかどうかは読者の判断にゆだねられているのです。

I read this story as a sort of parable, very close to the sort of teachings of Christ. Kenji was a fervent Buddhist. He really admired and believed in the Lotus Sutra, but he was also concerned and interested in the Christian faith and Christian teachings of universal self sacrificing love.

The woodsman is a representative or a messenger from the Japanese gods of the mountains, but he also sort of cries and shows his tears and his pain in order to make the people around him aware of what is really good, and what is really, really important and necessary to lead a good life.

The fact that Ryouji notices that and that he is sort of given a reward for it and in return wants to give something back to this strange savage man is very, very similar to the vision of Jesus Christ. One thing that's really good about this story is notion of Christianity or religion in your face. It's left as a sort of open question. You can read it that way. You can read it as a very, very simple fable of one evening scene at the festival.

2. 山男と「風」

この物語の象徴的表現の構造を明らかにするために、「風」という言葉に注目して作品を振り返ってみよう。

この物語の中で、「風」は4回使われている。いずれの場合にも、山男が作品に登場する場面で「風」が言及されている。

- ① 「そら、銭を出すぞ。これで許してくれろ。薪を百把あとで返すぞ。栗を八斗あとで返すぞ」言うが早いか、いきなり若者やみんなをつき退けて、**風**のように外へ逃げ出してしまいました。
- ② 「山男だ、山男だ」みんなは叫んで、がやがやあとを追おうとしましたが、もうどこへ行ったか、影もかたちも見えませんでした。**風**がごうごうっと吹き出し、まっくろなひのきがゆれ、掛茶屋のすだれは飛び、あちこちのあかりは消えました。
- ③ その時、表の方で、どしんがらがらからっという大きな音がして、家は地震の時のようにゆれました。亮二は思わずお爺さんにすがりつきました。お爺さんも少し顔色を変えて、急いでランプを持って外に出ました。亮二もついて行きました。ランプは**風**のためにすぐに消えてしまいました。
- ④ **風**が山の方で、ごうっと鳴っております。

(最後の文であり、薪と栗を置いて山男が去った後の描写)

この物語の出だしの文は「山の神の秋の祭りの晩でした」であり、締めくくりの文は「**風**が山の方で、ごうっと鳴っております」である。山男と**風**の象徴性を暗示するためにイメージやメタファーが効果的に用いられており、この童話は緻密に構成された物語であることに気づく。

3. 山男と月

山男と深く関連しているもう一つの自然は月である。最後の場面で「月」は「**風**」と共に言及される。

「亮二もついて行きました。ランプは**風**のためにすぐに消えてしまいました。その代り、東の黒い山から大きな十八日の**月**が静かに登って来たのです。見ると家の前の広場には、太い薪が山のように投げ出されてありました」。

「亮二はだまって青い斜めなお**月**さまをながめました。**風**が山の方で、ごうっと鳴っております」。

「月」は「**風**」と共に使われている。このような形で、山男—**風**—**月**の間に緊密な関連性が置かれていることに気づく。激しい体験をした後で家路を急ぐ亮二の天空には「ぼんやりしたすばるの星がよほど高くのぼって」いる。このような文学的描写によって読者は、ごたごたした人間のやり取りとは対照的な、冷静で沈黙した宇宙世界との対比に気づく。このような対照世界にどのような感情を移入するかは物語の文脈が指針となる。かぐらの笛がその時始まるが、「亮二はもうそっちへはいかないで、ひとり田圃のほの白い路を、急いで家のほうへ帰る」のである。「早くおじいさんに山男の話を聞かせたかった」からである。こうした文脈から、すばるの星の下で家路を急ぐ亮二は家庭的な温かさに包まれていることが暗示される。そして亮二のおこないは山男もその宇宙的な温かさの中に包める可能性を秘めている。「山男が嬉しがって泣いてぐるぐるはねまわって、それからだが天に飛んでしまうくらいいいものをやりたいな」という亮二の言葉は本心からの言葉であることを疑う者はいない。「全体きさんどこのやつだ」、「ぶん撲れ、

ぶん撲れ」とする山男への対応とは対照的である。

4. 山男の異質性

山男の異質性は物語の中で繰り返し言及されている。これをまとめると以下のようになる。

- ・風貌の異様さ

「それは古い白縞の単物に、へんな蓑のようなものを着た、顔の骨ばって赤い男で」「その眼はまん円で煤けたような金色でした」

- ・言語的障害（および所属不透明性）

「何か言おうとするのですが、どうもひどくどもってしまって語が出ないようすでした。」

「全体きさんどこのやつだ。」「そ、そ、そ、そ、そいつはとても言われぬ。許してくれろ」

- ・通常の経済観念の欠如

「さっき空気氈で十銭払ったので、あともう銭のないのも忘れて、団子を食ってしまったのだな。」

「どこの国に、団子二串に薪百把払うやづがあっか」

「山男」＝「山の神の托身」と考えれば、ロバート・キャンベル氏が言及している「キリストのイメージ」を山男に読み込むことができるかもしれない。ⁱⁱ

ただしキリスト教文化圏における「神(God)」と日本文化における「神」ではその内容に大きな違いがある。キリスト教のゴッドは唯一絶対の人格神で創造主である。これに対して神道の神は大自然そのものが神であり、山の神、海の神、風の神など八百万の神々がおわします。恵み豊かな日本の自然に対する感謝と崇拝の想いが日本文化の神概念の基礎に置かれている。

こうした違いは日英言語間の訳語にも反映される。日本における「神」の訳語は [gods] または [deities] が用いられる。

元々、日本人の精神の拠り所である神道には、唯一絶対の神という概念はない。いわゆる八百万の神々であり、山の神、海の神、風の神、つまり大自然そのものが神として捉えられる。それが神道の自然崇拝である。

「農耕民の信仰する山の神は、農神である。多くの地方で、山の神は年々歳々山と里のあいだを去来するという理解があった。すなわち、山の神は春に山から里に下り、田の神となって稲作と守り、秋には収穫をもたらして山に帰り、また山の神になる。このことにもとづいて日本の祭りの主要な部分がかたちづくられている」。ⁱⁱⁱ

山は奥山と里山に大別される。奥山は神や仏の住む他界あるいは彼岸であり、里が此岸であった。里山は里と奥山を媒介する地であった。氏神信仰や仏教とは別に、山に対する土俗的信仰においては山中異界の存在を認知している。そこは山の神が支配する世界である。「獵師や柚人は、野獣や樹木・山菜は山の神の恵みとして、儀礼と感謝の念を表した」。^{iv}

5. イメージ化の練習

言語の想起力を確認するために、ある言葉を聞いてその言葉に該当する物語中の場面を思い出す作業を学生に課した。キーワードを提示して作品のどのような場面を思い浮かべるか考えさせることによって、作品のプロット展開の把握能力および登場人物の形象化能力を養成することを目的とした。キーワードは教師が提示するだけでなく、学生自身が考える方法も文脈把握の上で効果的である。A3プリント用紙の表裏1ページに収まる物語を何度も繰り返し

目を通しながら、物語の構造を隅々まであたまに入れることができたようである。学生の回答を採録した。

・学生A

【人を憐れむ心】

男が首を垂れ、一生懸命口の中で何かをもにやもにやと言っている

山男が誰も助けてくれず、人はこんなにも冷たくて悲しいものなのかと感じている場面。

【同情心】

山男は悪者ではなく、正直な人なんだ。亮二が山男がしてしまったことに対して、悪気があったことではないと考えている場面。

【いじめ】

勢いよく怒鳴った。「ぶん殴れ」と誰かが叫んだ。村の若者、掛茶屋の主人、それを見ている村人たちが山男を悪者であると寄ってたかって怒鳴ったり、暴力までに発展させようとしている場面。

【助ける】

白銅を握りしめ、知らないふりをして皆を押しわけて山男のそばへ行った

亮二が山男の団子代を代わりに出して、山男を聴衆の中から逃がしてやる場面。

【喜び】

亮二が起き上がって叫んだ

山男が助けてくれたお礼にたくさんの薪や栗の実を亮二の家を持ってきた場面。

【人工物】

アセチレン 提灯

夜の暗闇の雰囲気を引き立たせ、何かが起こりそうな感じを出している。

【山男の印象】

金色の目 顔が角ばっていて赤い 正直。見た目はとても大きく、怖そうな印象のある山男が実際は見た目とは違い、正直で弱

弱しく描かれている場面。

学生B

・いじめについて

この物語では無銭飲食をした山男をとがめる団子屋と周りの若者の描写がある。これはただ無銭飲食をしたから怒ったのではなく、よそ者、自分たちと違う者に対する差別や偏見の気持ちも込められているのだろうなと思った。このようなことは学校でのいじめ問題や他民族・他文化への偏見の目など現代社会にも見られることだと思った。これらはすべて人間の心の中の自分本位で相手の本心を聞こうとしない悪い部分によって引き起こされていると思った。

・人を哀れむ心について

いじめられている山男の団子代を肩代わりした亮二は、外見だけで人を判断せず、その人が今どんな気持ちか、何を考えているのかと、その人の立場になって考えることをしていると思った。

・助けること

かわいそうだな、と思ってもやっぱりどこか他人的な目で見てしまい、困っている人を助けるという行動をとるのは難しいのに、亮二は迷いもなく山男を助けたのですごいと思う。

・よろこび

亮二が団子代をだしてくれたことで、いじめから逃れることができ、山男は親切な人間もいるんだと知り、嬉しかったと思う。亮二自身も人を助けられてうれしかったのだと思う。現代社会になくなりつつある助け合いの心だなと思った。

6. 学生の感想

学生に読後感を書いていただいた。

学生A：祭りの晩を読んで、この作品はとてもいい作品で、読むたびに心が暖かく

なって、人間の弱い心ってなんだろう。という疑問や、優しい気持ちを取り戻させてくれる作品だと思った。よそ者を寄せ付けない地元の絆を確かめ合う「祭」でよそ者の山男がいじめられているのを素直に「かわいそう」と感じることができる亮二のやさしさと、誠実さが美しいと思った。山男は、正直な心の現れだと思う。悪い事を悪いと正直に認める気持ちが最近の人々の中には薄れてきているような気がする。助けてもらった亮二にも、感謝の気持ちを精一杯示している所も正直者だと思った。もし自分が亮二の立場だったら、どう対応していただろうか。私も亮二のようにいじめられている人がいたら、素直に助けてあげられる人でいたいと思った。自然と人間は、うまく共生して生きていかなければいけないのに、人間は自然をねじ伏せようとする傾向があると思う。この作品は、人間が忘れかけている、思いやりの心と共生の大切さを問いかけてくれていると思う。暖かい人の心を感じさせてくれる祭りの晩を、繰り返し読んで素直さや誠実さを忘れずに生きて行きたいと思った。

学生B:

[山男の特徴]

- ・頑丈そうな大男
- ・古い白縞の単
- ・変な褌
- ・顔の骨ばった赤い男
- ・眼はまん円で煤けたような金色
- ・十銭の銀貨を持っていた
- ・広い肩
- ・村の若い者にいじめられ、髪をもじゃもじゃさせて額から汗を流して何べんも頭を下げていた
- ・ひどくどもる
- ・金銭感覚がない
- ・村人に余所者扱いされている
- ・出处を言わない
- ・村人には山男だと言われている
- ・山で狐わなを作っている
- ・亮二に薪百把と栗八斗のお礼をした。

[自然・宇宙を表す表現]

- ・ 青い林檎や葡萄
- ・ 山男が逃げた途端に風がごうごうっと吹き出し、まっくろなひのきが揺れ、掛け茶屋のすだれを飛ばし、灯りを消した
- ・ ぼんやりしたすばるの星
- ・ 霧
- ・ 狐
- ・ 熊
- ・ 地震
- ・ 風
- ・ 山男がお礼をしに来た時に東の黒い山から大きな一八日の月が静かに登ってきた
- ・ 青い斜めなお月さま

山男の特徴と自然の言葉から、私は山男が自然を統べる人物だと感じました。

最後に山の方でごうっと鳴る風は山男からの喜びの表現であるようだし、青いお月さまは山男の喜びの涙を示しているようです。団子屋から逃げ去るときも山男を隠すように風が吹いています。また、そもそもこの秋祭りは山の神の祭りです。山の神が山男のふりをして人間を見に来ているのかもしれませんが。そしてそこで団子屋の親父と一緒に山男をいじめる村人、反対に亮二のように心優しい人間の見極めをしにきているように思いました。一時が万事という言葉のように、いつ誰に見られているかわかりません。いつでも亮二のように心優しくあれたら良いなと感じました。

学生C:

1. テーマ

この物語のテーマは人々の心だと考えます。亮二の純粋な優しい思い、相手のことを思いやる心、山男の正直な心、それとは対照的な山男をいじめる村人達やそれをただ見ているだけの村人達の心、様々な人々の心が物語の中で描かれています。様々な人々の心が描かれている中で人として大切な心とは何かということが亮二と山男を通してテーマとなっているのだと思います。

人として大切な心とは山男のように正直であること、そして亮二のように純粋に相手を思いやる心なのだと感じました。今、社会は自分さえ良ければと自分の利益ばかりを追い求め自己中心的な考え方をする人々が増えてきてそこから様々な事件も起こっています。そのような社会の中で私達は本当の優しさ、本当に相手を思いやる心を見失ってしまっているかもしれません。しかし、人として大切な心を失ってはいけないのだとこのテーマを通して改めて考えました。

2. 山男が象徴しているもの

山男は得体の知れない恐れをも感じる神秘的なものであり、人ではないけれども人のような心を持つものとしての象徴だと思います。

山男は古い白縞の単物に、へんな蓑のようなものを着た、顔の骨ばって赤い男で、眼はまん丸で煤けたような黄金色をしています。その見たことも無い容姿をしているよそ者である山男に村人達は恐れと不信感を感じ、いじめたのだと思います。しかし山男は人ではないけれども人と同じような心、正直な心を持っていました。人ではなくても命あるものには同じように心があることを山男を通して宮沢賢治は描いているのではないかと思います。そして容姿が違っただけで山男の本質を見ず、恐れや不信感を感じ、いじめた村人達の心も山男の存在を通して象徴しているのではないかと考えました。

3. 村祭りでのいじめについて

ささいなことから村人達から山男がいじめられることになってしまったのは村人達の、よそ者でありそれも人とは少し違う容貌をしていた山男への得体の知れない恐れ

と不信感があったからだだと思います。村人達は山男の言うことに聞き耳を持たず、いじめます。それを見ている村人達も何もしていないでただ見ているだけでした。村人達は山男の本質的なところなど見ようとしていません。そこには人の醜い心、傲慢さが描かれているように感じました。そのような中で亮二は違いました。山男の正直さを感じ山男を助けます。正直さを感じて助けようと思い行動に移すことができた亮二はすごいなと感じました。亮二には恐れや不信感などなくただ純粋に助けたいという思いだけがありました。だからこそ山男も助けてくれた亮二に約束どおり恩返しをしたのだと思います。亮二が純粋であるのと同じように山男も純粋で心からの正直者であったのです。子供の純粋な心、自分の利益を考えず相手を思いやる心、そういう人として大切な心を忘れてはいけないのだと思いました。人には傲慢さや醜い心があります。そういう心が出てきてしまったときに亮二や山男の純粋に相手を思う心、思いやり、正直な心を思い出し、自分自身を見つめていくことが大切ではないかと思いました。

学生D：

1. テーマ：「お祭り」というのは、ある種「別次元」「異界」と定義してもいいかもしれません。日常とは切り離された神事や冠婚葬祭もそうですし、日常とは区別された空間と位置づけることができそうです。「見せ物小屋」とは、そういうところに出現する、まさに「異界」としての象徴のようなものなのかもしれません。登場する彼ら主人公たちの存在は、日常の生活や普通の人々との対比しかし、「彼らこそ人間なのではないか」という思いにたどり着いてしまう。・・・迷路に迷い込んでしまいます。「どちらが人間なのか？」ということ。

「何をさして人間と言うのか」と言うことです。社会の中での「弱者」を、賢治さんは幼いころから見続けていた。貧しい小作農の農民たちだ。質草を預けに、店（宮沢家）に来ていた農民たちを見ていたはずだからです。賢治さんの目は、いつでも「不当に価値を卑しめられる運命を背負わされた者」に対して、深い愛情のまなざしを注いでいたことが否応なく伝わってくるのです。この物語の「山男」もまた、普通の人から見れば、社会的な人間としては「失格者」として映るわけですが、しかし賢治さんによって、「社会性を持った人間よりも人間らしい」として描写され、物語として完結しているのです。こうしてこの童話を見ていきますと、なかなか奥深いテーマが流れていると感じます。祭りの晩のたった一夜の物語。・・・小品なのですが、冒頭に上げた映画の作品群にも通じることだと思うのです。つまり、「人間としての人間の価値とは何か」というような、人間のアイデンティティの問題を含んだ物語なのかもしれないと思えてくるのです。

2. 山男の象徴は何か？

理由は？ 宮沢賢治の作品に登場する「山男」には、ある共通した『特質』を見いだすことができるのです。それは、「純朴（じゅんぼく）」であること。「義理堅く、実直で、お人好し」であること。山男は、実は「雨ニモマケズ」という賢治さんの詩（メモ）にも登場する「木偶の坊（でくのぼう）」と重なってくる存在です。賢治さんの「ある理想とした人間像」が、童話の中で、木偶の坊や山男に姿を変えて描かれているのだと私は思う。この物語の「山男」もまた、普通の人から見れば、社会的な人間としては「失格者」として映るわけですが、しかし賢治さんによって、「社会

性を持った人間よりも人間らしい」として描写され、物語として完結しているのです。賢治さんが理想としたある人間像。・・・その姿が「木偶の坊」であり、「山男」だと思ふ。

3. いじめに対する亮二の対応の仕方についてどう思うか？

この童話の主人公の少年・亮二は、山男に対して、その純朴で真正直な態度に「かわいそう・きのどく」という感情に包まれてしまいます。・・・「きのどく」という感情は、賢治童話のキーワードでもあるのです。「気の毒」という感情は、賢治さんがいつでも「弱者」を見つめた時、いたたまれない気持ちに包まれた時の感情表出なのです。

学生E

「祭の晩」では、村の人々（掛茶屋の主人や亮二など）と村人にとって異質な者である山男とのやりとりが描かれている話である。その中でも祭の晩に村にやってくる山男に注目して物語を見てみたいと思う。まず山男の容姿であるが、古い白縞の単衣に変な蓑のようなものを着ており、顔の骨ばった赤い大男でその目は煤けたような金色である。それは村の中でも異様な格好で、亮二も不思議がってしげしげと見てしまうほどだ。次に山男が登場するのは、茶屋で団子泥棒としてとがめられているところだ。

もちろん、お金もないのに団子を食べってしまう山男がわるいが、村人はみんなで山男を囲み山男の言い分も聞かずに、よそ者だからという理由でリンチにする。山男という異質な存在が、村人を「よそ者の弱みをつかんでやりこめる」という排他的な集団へとさせている。このことにより、この村の多くの若者がよそ者を嫌っていること、

また、村人のよそ者に対する恐怖のようなものが表現されている。山男は薪を持ってくるから許してほしいと涙ながらに言うが、誰も話を聞いてくれない。そして、そんな山男を助ける亮二が現れほかの村人とは違った考え方、素直さ、優しさがきわだってわかる。

亮二が家に帰りおじいさんにそのことを話していると、どしんという音がして家の前には山男からの薪と栗が大量に置いてあり、亮二は今度お返しに着物や夜具を持って行ってあげようとおじいさんと話す。村

人とは違い、よそ者でもある山男に相互的コミュニケーションをつくりだしている。山男は人間が危険な時に登場するのかもしれない。正直者の山男の登場により村人のよそ者に対する気持ちや、亮二やおじいさんの村人とは違う気持ちがよくわかるようになっていく。山男の登場は、村人にこのような気持ちが良くないことだと知らせようと登場しているように思える。人間がよそ者を受け入れられない狭い心のままでは、これから先危険だと思い、山から降りてきたのかもしれない。

あとがき

この作品は、老人ホームなどにおいて評判が高いとのことである。インターネットのあるホームページに次の記事を見つけた。「筆者は、或る有料老人ホームで80歳から100歳ぐらまでの高齢者に対して、賢治童話を読んであげているのですが、この作品の評判がいちばんよいのです」。⁵ 体力や運動能力の落ちた高齢の人々にとって、いたわりの気持ちや、優しさが何よりもありがたく感じられるのであろう。

このような物語の構造理解を深めながら初等教育の中でじっくり読みこんでいくことは感情移入の能力を育成して社会的に弱い人々の立場に立って物事を考える能力を生み出す。

幼児期における物語との出会い、すなわち物語の中の登場人物(動物)との出会いは、幼児にとって人生のモデルとして作用し、成人した後のその人の行動の指針となることがある。

本稿では、短い短編を繰り返し読み深めながら、物語の構成要素としてのキーワードとその言葉によって生み出される文学的イメージを想起する方法を用いて物語の理解を深める方法を考察した。具体的には、物語を構成しているキーワードを提示してその言葉に当てはまる状況を想像するように指導した。このイメージ化の作業は学生の物語理解を深めるために有効な方法であり、将来学生が初等・中等学校の教職についた場合に利用できるものである。

イメージ化の作業は静岡大学教育学部および静岡県立短期大学の看護科と歯科の学生にお願いした。「祭の晩」を深く読みこんで、憐れみの心使いの大切さに気付いたという学生からの感想を得て、教材としての有用性を再認識することができた。

註

-
- i 「祭の晩」のテキストは「青空文庫」で入手できる。
http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/1938_18756.html
- ii 「山男は日本の山の神々からの遣いです。涙と苦痛を村人に見せたのは善の尊さを教えるため。それをとっさに感じ取った亮二は山男から恩返しをされます。それはイエス・キリストの考えに似ています」。
- iii Cf. インターネット記事：「山と神2」
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~yamamosa/5sinkou-2.html#lebe3>
参考資料として次の四冊が記載されている。「定本柳田国男集」巻四 光書房。堀田吉雄著「山の神信仰の研究」光書房。日本山岳ルーツ大辞典。日本語大辞典。
- iv Cf. インタネット記事：〈特集〉FINDTHEROOT「自然」と「人間」のあいだ〈永遠回帰生死を超えるもの〉
- v. Cf. インタネット記事：私が愛する宮澤賢治の作品、『祭りの晩』
<http://www.news.janjan.jp/culture/0910/0910302411/1.php>

